



統合失調症について

皆さんは、「統合失調症」という心の病気をご存知ですか。「うつ病」や「パニック障害」のように名前から察することが難しい病名かもしれませんね。我々の心（脳）は現実と非現実、実際に起きていることと想像しているだけで実際に起きていないことなど、様々な情報を整理しまとめてくれています。そうした働きがうまく機能しなくなり、妄想や幻覚という症状が起き、感覚・思考・行動がうまく統合できなくなると日常生活で支障をきたす場合があります。そうした症状がある時、「統合失調症」と診断されることがあります。

この病気は、脳の何らかの働きが原因である一方、その全てが解明されたわけではありません。そのため統合失調症に対して偏った捉え方をする人も少なくありません。100人におよそ1人がかかると考えると、身近で悩んでいる人がいるかもしれませんね。

そこで、ここからは、厚生労働省のHPに紹介されている統合失調症の症状を紹介しますね。統合失調症は、青年期以後の人生で起きる著しい変化がきっかけで発症すると一般的には考えられています。幻覚や妄想は他の病気でも現れることがありますが、幻覚や妄想の内容や気分の特徴があります。この病気の辛さは生活に支障が生じることで、日常生活での会話や行動や作業が適切にできなくなります。例えば、会話や行動がまとまらない、自分と他人の感情の理解がうまくできず人と関わるのが苦手となり、やる気が減退する、逆に攻撃的になるなどの症状があります。そのため、引きこもったり、何もせずダラダラと過ごしたり、身の回りの世話さえ面倒になることもあります。もっとも辛いのが、自分でもそれが病気であると気がつかないことです。一方で、病気に気づき適切に治療されると病状は改善され日常生活の支障も減ります。現在のところ、治療の第一選択は専門家による薬物療法であり、精神療法などを組み合わせることでより効果的であるといわれています。

薬物療法以外の治療法の一つに芸術療法があります。芸術療法は、20世紀以後に欧米を中心に広がった心理療法ですが、その起源は紀元前のシャーマニズム的な活動にさかのぼるともいわれます。1920年代にPrinzhorn(プリッツホン)が出版した本、「*Artistry of the mentally ill*」は、精神的に病む患者らの絵画を紹介し、彼らの作品の芸術性にも注目しています。彼は、患者の作品が病理性に因るものと捉えるだけでなく、人間が持つ芸術性の根源、つまり原始的な表現力でもあり、その芸術性を評価しました。20世紀半ばから欧米を中心に精神的疾患を持つ人たちの芸術活動の治療的効果について検証されるようになり現在に至っています。

私は芸術療法における芸術活動は正解・不正解はなく、事実も空想も、色も形も、「何でもあり」の世界を芸術的に表現することだと捉えています。Arieti(アリエティ)が創造力について述べているように、芸術活動は無意識と意識、現実と空想、思いや考えを表象化して繋げてくれる、「分断ではなく統合していく」魔法の力を持っています。

引用文献

- ・アリエティ, 加藤正明・清水博之共訳 1980 『想像力：原初からの統合』新曜社
- ・厚生労働省 知ることからはじめよう：みんなのメンタルヘルス
[統合失調症 | 疾患の詳細 | 専門的な情報 | メンタルヘルス | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp)
(2021年3月29日取得)
- ・Prinzhorn, H. 1995 *Artistry of the mentally ill (Reprint)*. Springer-Verlag Wien.

